

トマス・アクィナスにおける経験の意味

——人間知性に関する議論をてがかりとして——

芝元 航平(上智大学)

トマス・アクィナスには人間の知性認識を論じる際に、「経験」(experimentum; experientia)について語っているテキストがある。

[1]もし或る人が知性的魂が身体の形相でないと言おうとするならば、知解することであるその働きがこの人間の働きである仕方を見出さなければならない。というのも、各々の者が、自分自身が知解するところの者であるということを経験している(experitur)のだからである。(『神学大全』第76問題第1項主文)

[2]そして、われわれはこのことを、われわれが普遍的な諸形相を特殊的な諸条件から抽象するのを知覚する限りにおいて、経験によって認識している(experimento cognoscimus)。そして、それ[抽象すること]が知覚的なものどもを現実態においてあるようにすることなのである。ところで、いかなる働きも、形相的にそれに内属する或る根源によってというのでなければ、或る事物に適合することはない。それは、上で、可能知性について議論されたときに言われたようにである。それゆえ、この働きの根源であるところの力は魂の内なる何らかのものであるのでなければならない。(『神学大全』第1部第79問題第4項主文)

[3]経験によって明らかのように(ut per experimentum patet)、魂は、身体と結合している限りでは、自らを表象像に向けることなしには何も知解することができない。(『神学大全』第1部第89問題第1項)

これらのテキストは、人間知性やその働きの在り方を論じている。すなわち、[1]は人間の知性的魂が身体の形相であることを、[2]は普遍的概念の抽象の働きを行う能動知性が個々の人間の知性的魂に内属する能力であるということ、[3]は人間が知性的認識を行う際には感覚的な表象像への振り返りが必要であることを示している。トマスは人間知性に関わるこれらの問題を「経験」に基づいて論証しようとしているのである。

トマスが明確にこれらの問題の根拠として「経験」を語るようになるのは中期の『対異教徒大全』以降であると思われるのであるが、感覚的認識ではない知性認識に関わる問題の論証の根拠を「経験」に求めることにはどのような意味があるのだろうか。この問題については、すでに稲垣良典が論じている(“Intellectus Agens and the ‘Empiricism’ of Thomas Aquinas”『中世思想研究』第7号、1959年、pp. 121-140 および「能動知性とトマス・アクィナスの「経験主義」(要約)同上書、pp. 114-116)。稲垣は、「経験主義」が「本有観念ならびに「表象なき思惟」の否定」および「感覚的経験の明証」の重視という特徴を持つ哲学的立場であることを指摘したうえで、トマスが能動知性の働きがわれわれによって経験されると理解したことの前提にはあらゆる知的認識を成立させる根拠としての「存在の経験」(the experience of being)がなければならないと論じている。

しかし、トマスが存在の認識について「経験」の語を用いているテキストは見当たらない(稲垣もトマスのテキストの箇所は指摘していない)。稲垣の指摘は重要な洞察を含んでいると思われるのであるが、トマスの「経験」についてトマスのテキストを入念に

調べることでこの問題についてさらなる解明を行うことができるように思われる。

「経験」について論じられている哲学史上重要なテキストはアリストテレスの『分析論後書』第2巻第19章および『形而上学』A巻第1章であるが、トマスはこれらの箇所について詳細な註解を行っている。そこでは、基本的には技術(ars)や学知(scientia)が一般的な知であるのに対して、経験は特殊的な知であるという枠組みで註解がなされている。本発表では、まずトマスの註解を検討することで、トマスにおける経験概念の特徴を明らかにすることを試みる。その上で、トマスが人間知性に関する議論において経験を語ることを意味を解明することを目指したい。

発表者の見通しは、次の通りである。トマスは、知性認識の働きには自己が「在る」ということに関わる存在の知覚が伴っていると考えている。これは「何であるか」に関わる本質認識とは区別される認識であり、本質認識に先立っていると考えられる。そして、存在していることは個体について本来的に語られることである。現実存在しているのは、普遍的な概念や意味内容ではなく、個々の事物である。このことから、トマスは、個体の存在に関わる存在の知覚という「経験」によって、知性的魂が個々の人間の身体の形相であることや、能動知性の個々の人間の知性的魂への内属や、個々の人間の知解の働きが感覚的表象への振り返りを必要とすることを論証するのである。そして、このような知覚が「経験」と呼ばれるのは、普遍的な本質認識の前提としての個体における存在を認識しているからであると思われる。つまり、現実存在している個体は最も特殊なものであることから、経験の名にふさわしいと考えられるのである。もっとも、トマスは、何であるかという本質に関しては、物体的本性の個性性は知性によっては認識できないと考えている(質料的事物の個性化の原理である第一質料はいかなる規定性も欠いているので把握不可能である)。個であるということは、存在しているということに即して理解されるのである。その一方で、存在することは、それ自体として考えると最も普遍的なものである(いかなる事物も「存在する」)。したがって、個を存在において把握する経験において、最も普遍的な存在も理解されていると考えられ、そのことがあらゆる普遍的認識の前提になっていると考えられる。前述の稲垣の「存在の経験」はこのように理解することができるように思われる。しかし、存在そのものを経験するというよりは、むしろ、知性の自己の個人的な働きの経験(および感覚的個体の経験)における前提として存在の把握があると言う方が適切であるように思われる。

トマスの経験概念については、近年にも詳細にその概念を分析した研究が発表されている(M. J. Barker, “Experience and Experimentation: The Meaning of Experimentum in Aquinas,” *The Thomist* 76, 2012)。その中でBarkerは、experimentumの固有の意味は、固有の抽象に先立つ思考力による共通性の帰納的採取であると結論づけている。しかし、経験を固有の知性認識以前の認識に限定するこの解釈に対しては、上で述べた稲垣の解釈を踏まえるならば、慎重な取り扱いを行う必要があるように思われる。

経験概念は、近代以降の哲学においてもきわめて重要な概念である。本発表では、単なる感覚的経験の枠を超えるトマスの経験概念を検討することによって、経験概念を理解する新たな視点を提示することを目指したい。